

私達が今すべきこと

古堅中学校 三年五組 友寄 寧珠

「これは本当に人間が起こした悲劇だ。たの
だらうか。」

毎年、学校で戦争の話や援業を聞くたび、
こう思っています。もうろん、人間同士
が戦い、人間が起こした出来事であり、私た
ちは今を生き、そしてこれかろを生きるため
に受けとめなければなりません。ですが、今
の平和な沖繩とはあまりに違いすぎて、本当
にこの場所で、私達と同じ人間が起こしたの
だらうか。と思っ、てしまいます。そしてそれ
と同時に、あの悲惨な出来事も、と知らな
ければ、と強く感じさせられます。

沖繩戦が始まった一九四一年十二月八日か
ら、終戦するまでの約三ヵ月にもおよぶ長い
戦争の話を聞いて私は特に二つの体験談がと
ても心に残りました。

まず一つ目は、石垣市に住んでいる、89歳
の女性の方の話です。

この方は、戦時中、女性学徒隊として病院
で患者の治療をしていたそうです。

しかし、衛生兵の許可がはいと勝手に薬や
水を与えることができず、沖縄の人が

「アーマー・ミジグワ」又マセー（お母さん、

水飲ませて）と夜中からなげいているの
を見殺しにするしかほか、たそうです。また、

県民は、名前が変だとか、標準語が分から
ないという理由で、ばかにされたんだそう
です。

そんな状況で兵士や県民が七くほ、ても、

あの時はとにかく滅私奉公で、天皇陛下のた
め、国のためとしか思えなかつたそうです。

この話を新聞で目にした私は、つづられた
文章を読んで、ただでさえ鳥肌が立つ程の
恐怖を覚えたのに、実際にその現場にいた人
達のことを考えると本当に苦しむ、たんだろ
うな。という気持ちの反面、国のために死ぬ
ことが当たり前だと思っ、てしまわざるを得な
い状況を起こしてしま、た戦争に強い憤りも
覚えました。

そして二一日は、私の曾祖母が実際に体験した事を聞いたものです。

私の曾祖母は昔からとても優しく、いつも笑顔で私の大好きな人でした。

しかし六月二十三日だけは、まるで別人のようになり、涙を流し、震えた手を合わせていました。

小さい頃こそ何をやっていられるのか疑問に思っていた私でしたが、私が小学三年生にたった年の慰霊の日に、曾祖母が実際に体験したこ

とについて、詳しく話してくれました。

私の曾祖母は戦時中、一歳の男の子と、生まれ、まだ何カ月かの女児を抱えて必死に逃げまわっていたそうです。泣き声を出してしまつ子も二人も連れて逃げるのはとても大変で、何度も壕から追いつけられ、死にものす。それでも二人の子を守る為に、死にもの狂いで逃げ続け、終戦するまで守り抜き、その子は今、私の祖母の兄姉として生きており、曾祖母も、私が四年生に当たるまで、かり命

を大事に生きていました。

この話を聞いて私は小学生ながらも、曾祖母の話に涙を流していたそうです。あの地獄の様な状況でも必死に子を守り、た曾祖母を、心の底から尊敬しています。そして毎年六月二十三日になると、この体験談が、遮って来ます。

戦争をして生まれるのは悲劇と天人の死者だけだ、何もいい事はありません。私達は今を生き未来へ伝えるために、過去の悲劇を学

び、この耳で聴き、受け取り、二度とあの過ちを起こさないために、数少なくなってきた体験者から多くの事を知り、今の世の中を見つめ、永遠の平和を願い、今生きてゐる事へのありがたさを感じることが大切なのだと思つて強く思います。しかし思っているだけではどうにもなりません。さあ今こそ、私達が世界平和のために行動するときです。